

大学体育実技の学生による授業評価に関する比較研究  
－授業改善のために本学学生を手がかりとして－

A Comparative Study on the Evaluation of Physical Education  
Classes by the University Students  
－ As the Helpful Leads by The Seisen University's  
Students for the Faculty Development －

多胡陽介・永田靖章  
(Yousuke TAGO & Yasuaki NAGATA)

要 旨

本研究の目的は、本学学生による体育実技の授業評価結果に基づき、今後の授業改善のための基礎的資料を得ようとした実践研究である。対象は、授業を受講した4年制学部学生（人間心理学科）と短期大学部生（企業マネジメント学科・介護福祉学科）の全員とし、前期授業の全種目とした。

結果は、授業への好意的評価は、人間心理学科、企業マネジメント学科、介護福祉学科の順であり、また、女子学生よりも男子学生の方が、日本人学生より外国人留学生の方が好意的であり、種目による違いはそれほど大きなものではなかった。今後の授業においては、得られた結果を参考に、学生の特性に応じた指導の仕方の使い分けをしていかなければならないことの知見が得られた。

**Key Words** : 大学体育実技、授業評価、授業改善、基礎的資料、実践研究

I. 緒言と問題の設定

我が国では、これまでに大学における経営評価や授業評価という言葉は理解されない風土が存在していた。戦後、大学基準協会が設立され、アメリカ式のアクレディテーション・システム (Accreditation System) を導入しよ

うと試みたが、実際には機能することができなかった<sup>1)</sup>。しかし、昭和60年代以後の臨時教育審議会によって、大学が自らの教育研究活動を律するために、自己点検・評価をしなくてはならないとの提言によって、大学における評価の問題がクローズアップされてきた<sup>2)</sup>。

この提言を受けて、平成3(1991)年の大学審議会答申「大学教育の改善について」では、各大学が自らの責任において教育研究の不断の改善を図ることを促すための自己点検・評価のシステムを導入することが提言された<sup>3)</sup>。その結果、大学設置基準が改正され、自己点検・評価が努力義務化されるに至った<sup>4)5)6)</sup>。また、平成10(1998)年の大学審議会答申「21世紀の大学像と今後の改革方策」では、この評価の問題がクローズアップされて、大学評価・学位授与機構が創設される契機となった。さらに、平成11(1999)年には、再度大学設置基準が改正され、自己点検・評価結果は努力義務から“努力”が消えて義務化された上に、自己点検評価結果について外部者による検証(外部評価)が努力義務化された<sup>7)</sup>。

そして、平成14(2002)年8月には、中央教育審議会が「大学の質の保証に係わる新たなシステムの構築について」の答申で、大学改革の方向性として、国の事前規制である設置認可を弾力化し、大学が自らの判断で、社会の変化等に対応して多様で特色のある教育研究活動を展開できるようにするとともに、大学設置後の状況について、当該大学以外の第三者が客観的な立場から継続的に評価を行う体制を整備する必要性を提起した<sup>3)</sup>。これを受けて文部科学省は、同年11月に学校教育法を改正し、新たな第三者評価システムを平成16(2004)年度から義務化することにした<sup>1)</sup>。

一般的には、自分が自分のことを振り返ってみることを自己点検・評価といわれているが、大学設置基準では「点検及び評価の結果について、当該大学の職員以外の者による検証を行う」という表現がされている<sup>7)</sup>。大学における評価は、大学が自らの責任において教育研究の不断の改善を図ることを促すために行われることを基本としている。そして、それぞれの大学が、どういう活動をしているかを外部に対して説明するために行う活動ともいえる。

これが、説明責任 (Accountability) である。また、大学設置基準では、外部による検証以外にも、それらの結果を情報として公開することが求められている<sup>7)</sup>。

小中学校でも、平成 14 (2002) 年度から設置基準が策定され、自己点検に相当するシステムが導入されている。今後は、教育機関だけでなく公的にサービスを行う機関は、その活動の責任を持てるように評価システムが拡大する方向でもある<sup>7)</sup>。

これらの中の教育評価の一部として、学生による授業評価という方法を導入する大学が増え、現在では全国の大学の 3/4 以上で実施されている。大学教員の中には、学生による授業評価については「学生に教員の授業の評価ができるはずがない。」などの考えをもつ教員も多い。しかし、実際に実施してみると、学生たちの評価はかなり当を得ていることが多い。

そこで、本研究では、自分達の授業改善のための方策を得る一つの手だてとして、実際に自分が指導している授業を含めて「体育 (スポーツ) 実技」(基礎科目) の授業を全て取り上げることにした。そして、学生による授業評価の結果を検討することにより、授業改善の方策を探り出すことを主目的とする実践研究である。

具体的には、第一報である今回は、基礎的な資料を得るための視点として、次の 5 つの視点を設定した。それは、本学における① 4 年制学部と短期大学部の比較、② 各学科の比較、③ 性別による比較、④ スポーツ種目別による比較、⑤ 外国人留学生と日本人学生との比較である。この 5 つの視点ごとに、共通する点と異なる点を分析して、授業改善の方策を探ることとした。

## II. 研究の対象と方法

### 1. 研究の対象

#### 1) 対象の授業

聖泉大学における「スポーツ実技」「体育実技」の全授業

#### 2) 対象の授業のねらい

「学生各個人の現在持っている各スポーツの能力を基に、積極的な関心・意欲・態度で各授業内容に取り組み、試行錯誤と相互交流活動の中で思考力・判断力・応用力を養い、技能や知識・理解力を習得し、生活スポーツ化できるようになること」

### 3) 対象の授業内容；( )内は短期大学部

- (1) オリエンテーション：1単位時間（1単位時間）
- (2) インディアカ：4単位時間（4単位時間）
- (3) ユニバーサルホッケー：4単位時間（3単位時間）
- (4) ソフトバレーボール：5単位時間（4単位時間）
- (5) まとめの会：1単位時間（1単位時間）

### 4) 対象授業の方法と学習形態

授業の形態は、グループ学習で、ニュースポーツを行い、四年生学部は2名のチーム・ティーチングで行った。

### 5) 対象の学生

- (1) 人間学部人間心理学科第1学年受講学生：40名
- (2) 短期大学部企業マネジメント学科第1学年受講学生：23名
- (3) 短期大学部介護福祉学科第1学年受講学生：22名

## 2. 調査の期間

平成15年4月～平成15年7月の第1 Semester

## 3. 研究の内容（学生による授業評価の内容）と調査方法

### (1) 調査の内容

指導者自身の授業における教育内容や教育方法の改善を行うために、以下の12項目を設定した。

- |          |          |
|----------|----------|
| ①体系的な内容  | ②解りやすい説明 |
| ③聞き取りやすさ | ④興味のある内容 |
| ⑤効果的な説明  | ⑥価値のある内容 |

- ⑦学生への参加の促し方      ⑧適切な助言や相談
- ⑨クラスのまとめ方          ⑩積極的な出席
- ⑪意欲的な取り組み          ⑫他の学生への推奨

(2) 調査の方法

回答は、「大いにある」から「全くない」までの五段階尺度法によって、各学生の主観的確率で記入をした。この他に、自由記述による授業に関する学生の意見や要望を記載した。

なお、調査は、各種目の最終授業の終了直後に行った。

4. 研究の手続き

(1) 比較研究の視点

本研究においては、本学における学生による授業評価の結果を以下の5つの観点で分析し、基礎的資料を得るために検討し比較研究を行った。

- ①4年制学部と短期大学部の比較検討
- ②各学科の比較検討
- ③性別による比較検討
- ④スポーツ種目による比較検討
- ⑤外国人留学生と日本人学生との比較検討

(2) 分析の方法

それぞれの研究の視点ごとに、調査内容の各項目ごとの平均値と標準偏差とを算出し、その結果をt-検定を用いて比較検討した。

Ⅲ. 研究の結果と考察

1. 4年制学部と短期大学部の比較検討

4年制学部と短期大学部の平均値を示したのが、図1である。また、表1は、4年制学部と短期大学部の平均値と標準偏差及びt-検定結果を表したものである。全体としてこの結果からいえることは、短期大学部より4年制学部が有意に高い授業評価をしていることがわかる。

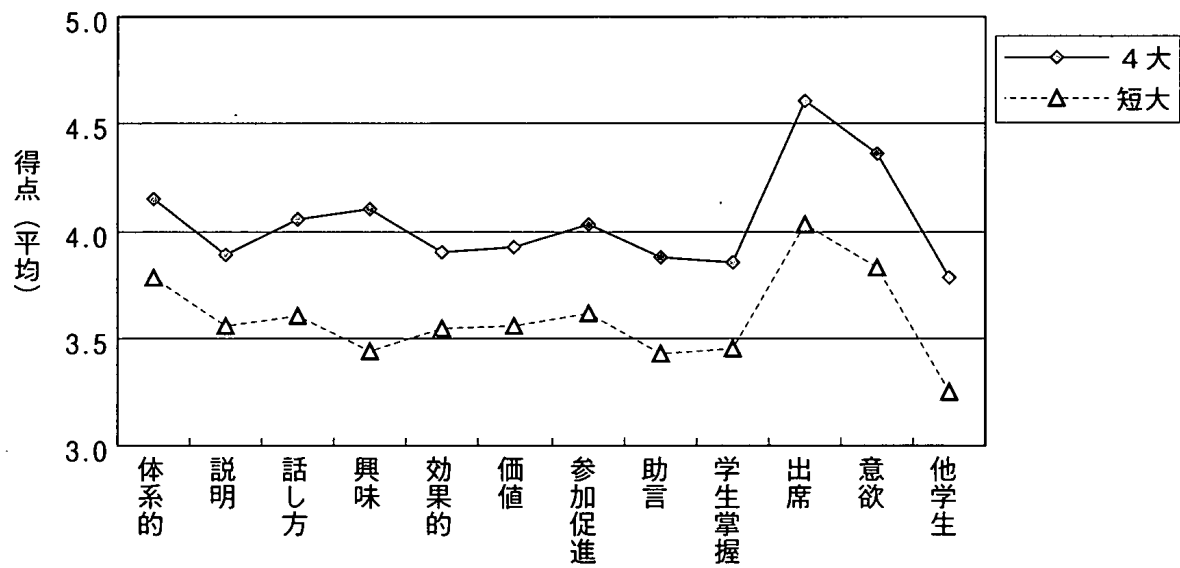


図1 4大・短大別 得点グラフ

表1 4年制学部と短期大学部の平均値と標準偏差

	4大		短大	
	平均 (順位)	標準偏差	平均 (順位)	標準偏差
体系的	4.1 (3)	0.78	3.8* (3)	1.05
説明	3.9 (7)	0.82	3.6* (4)	0.98
話し方	4.0 (5)	0.75	3.6* (4)	1.15
興味	4.1 (3)	0.88	3.4* (9)	1.29
効果的	3.9 (7)	0.78	3.5* (8)	1.21
価値	3.9 (7)	0.95	3.6* (4)	1.15
参加促進	4.0 (5)	0.80	3.6* (4)	1.03
助言	3.9 (7)	0.85	3.4* (9)	1.06
学生掌握	3.9 (7)	0.84	3.4* (9)	1.15
出席	4.6 (1)	0.64	4.1* (1)	1.23
意欲	4.4 (2)	0.74	3.9* (2)	1.22
他学生	3.8 (12)	1.04	3.3* (12)	1.34

\* P &lt; 0.05

このような結果となった原因としては、4年制学部は二人の教員が授業を担当したのに対して、短期大学部は一人のみの担当であった点が考えられる。また、短期大学部の教員は、社会人1年目であったため、指導力不足であったことが考えられる。

その一つには、第1回目の授業のオリエンテーションの際、4年制学部は授業の目的・方針を十分に説明し、学生に理解してもらうよう働きかけたのに対し、短期大学部は授業の目的・方針を明確にできないまま授業が進められた点が考えられる。そのため、ニュースポーツを教材として取り上げた理由や、グループ学習の意義、大学と高校における学習内容の違いに、短期大学部の方では理解の差が感じられた。

また、短期大学部では、毎時間の授業のねらいについても学生に十分に理解させていなかったことから、学生は授業にどのように取り組んだらよいかわからず“やらされる”授業になる傾向があった。

その他には、集団指導・チーム編成の仕方の不慣れ、授業開始時の雰囲気作りの未熟さなども原因であったと考えられる。これらから、短期大学部では、全体的な授業の改善が必要であるといえる。

表1の平均値順位をみると、4年制学部、短期大学部とも共通して出席、意欲の順で平均値が高くなっている。

このことは、学生が努力すれば良い成績で評価されるために、十分に授業に出席をし、意欲的に取り組もうとしたことから高い平均値となったと考えられる。したがって、これらの平均値が高くなるのは当然であり、教員の指導力に関わるその他の値がいかに高くなるかが、今後の授業の質の向上のために重要であると考えられる。

また、興味ある内容であったかについては、4年制学部は3番目に順位が高く、短期大学部では9番目の順位であった。このことから、4年制学部と短期大学部では、興味ある内容であったかが大きな相違点であり、短期大学部においてはいかに学生に興味を持たせる授業ができるかが重要な要素であると考えられる。

また、平均値順位の最下位は、他学生に勧めたいかが共通していた。このことは、今回担当した授業が学生にとって必ずしも楽しく有意義なものではなかったことが推察される。

## 2. 各学科の比較検討

図2は、各学科ごとの平均値を表したものである。また、表2は、各学科ごとの平均値と標準偏差を表している。さらに、表3は、各学科ごとの検定結果を表している。

この結果から、人間心理学科・企業マネジメント学科・介護福祉学科の順で平均値が低くなっていることがわかる。これらから、学科ごとに学生の認識が異なり、そのことが授業に影響を及ぼしていると考えられるが、その原因はここでは明らかにはできない。

しかし、実際の授業で感じられたことは、人間心理学科より、企業マネジメント学科、介護福祉学科の方が種目内容に飽きやすく、そのことから意欲的に取り組もうとしない学生が多く見受けられた。そこで、学科の特性も考慮して授業計画を立てることも必要であると考えられる。

表2及び表3に基づく、人間心理学部と企業マネジメント学科との比較で

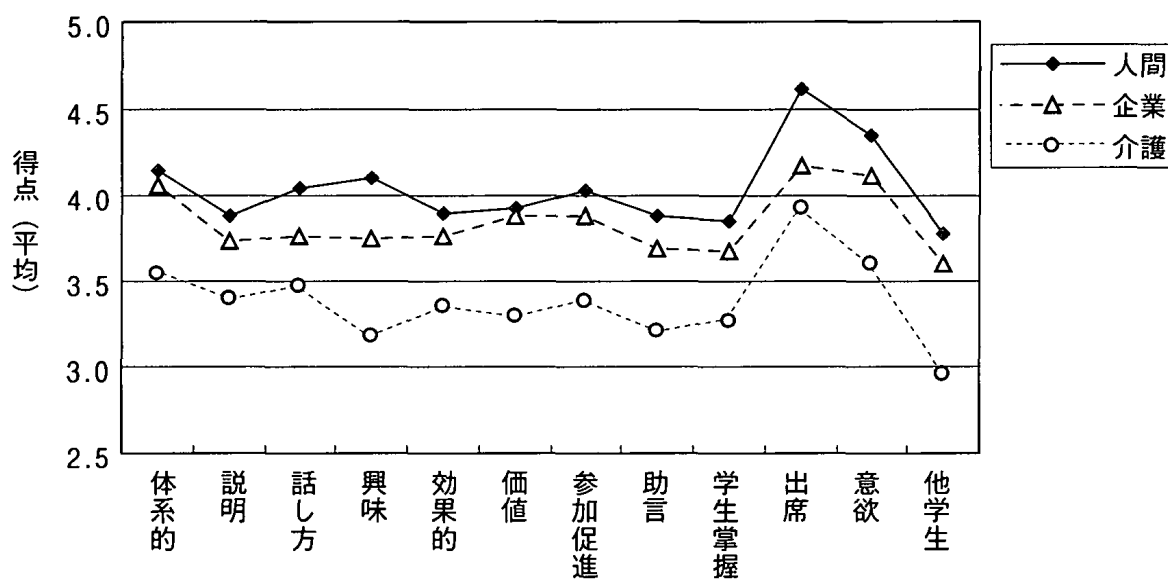


図2 学科別 得点グラフ



表2 各学科別の平均値と標準偏差

	人 間		企 業		介 護	
	平均 (順位)	標準偏差	平均 (順位)	標準偏差	平均 (順位)	標準偏差
体系的	4.1 (3)	0.78	4.1 (2)	1.04	3.5 (3)	1.02
説明	3.9 (7)	0.82	3.7 (9)	1.05	3.4 (5)	0.90
話し方	4.0 (5)	0.75	3.8 (6)	1.15	3.5 (3)	1.14
興味	4.1 (3)	0.88	3.8 (6)	1.25	3.2 (10)	1.27
効果的	3.9 (7)	0.78	3.8 (6)	1.21	3.4 (5)	1.19
価値	3.9 (7)	0.95	3.9 (4)	1.17	3.3 (8)	1.08
参加促進	4.0 (5)	0.80	3.9 (4)	0.98	3.4 (5)	1.01
助言	3.9 (7)	0.85	3.7 (9)	1.08	3.2 (10)	1.01
学生掌握	3.9 (7)	0.84	3.7 (9)	1.12	3.3 (8)	1.16
出席	4.6 (1)	0.64	4.2 (1)	1.20	3.9 (1)	1.30
意欲	4.4 (2)	0.74	4.1 (2)	1.31	3.6 (2)	1.14
他学生	3.8 (12)	1.04	3.6 (12)	1.27	3.0 (12)	1.34

表3 各学科別の検定結果 (数字は危険率を示す)

	人間：企業	企業：介護	人間：介護
体系的	0.53	0.01*	0.00002***
説明	0.30	0.07	0.0004***
話し方	0.06	0.16	0.0001***
興味	0.04*	0.02*	0.00000004***
効果的	0.39	0.07	0.0003***
価値	0.81	0.01*	0.0001***
参加促進	0.30	0.01*	0.000005***
助言	0.23	0.02*	0.00001***
学生掌握	0.25	0.06	0.0001***
出席	0.002**	0.28	0.000003***
意欲	0.13	0.03*	0.0000002***
他学生	0.33	0.01*	0.00001***

\*\*\* P < 0.001 \*\* P < 0.01 \* P < 0.05

は、興味のある内容であったか、よく出席したかで人間心理学部の値が有意に高かった。

このことより、企業マネジメント学科では、授業内容への興味が人間心理学科と比べて低く、学生が興味を抱くように授業を工夫しなければならなかったことを示している。その一つには、ニュースポーツの持つ楽しさを教師が十分に理解し、その特性に応じたゲーム展開や、目標を持たせることが極めて重要と考えられる。また、4単位時間などの短い授業数で種目を終了するのではなく、6単位時間以上の時間をかけて、種目の特性に触れられるよう、内容について深く習熟させる必要があったと考えられる。

企業マネジメント学科より人間心理学部の方がよく出席したことについては、前述の興味ある内容であったかという項目で、人間心理学科の平均値が高かったことが間接的に影響しているものと考えられる。

企業マネジメント学科と介護福祉学科との比較では、体系的であったか、興味のある内容であったか、価値があったか、参加を促したか、適切な助言を行ったか、意欲的に取り組んだか、他学生に勧めたいかで、企業マネジメント学科が有意に値が高かった。

企業マネジメント学科と介護福祉学科は、同じ時間に同じ授業を受けているので、これらは担当教員の指導力不足のみならず、介護福祉学科は厳格な評価をする学生が多いのか、また、全体的に教師依存が強く、学習意欲・自主性が低い特性があるのか、その2点が考えられる。しかし、介護福祉学科には留学生がいないので、後に述べる留学生と日本人の比較で留学生が平均値を上げている可能性も考えられる。

厳格な評価として考察すると、体系的であったかについては、授業の練習段階の初期において、いきなり難しい技術練習を行うことがあったので、教員が全体的な技術構造を良く把握し、段階的に学習できる授業計画を立てることが重要であると考えられる。

価値があったかについては、学生に対する教員の問いかけが少なかったので、学生自身が自己の技術についてどの程度上達したかが把握できていない

ように感じられたので、その点の改善が望まれる。

また、人間心理学科と介護福祉学科との比較では、すべてにおいて人間心理学科の値が有意に高かった。

共通点としては、表3より平均値の順位において各学科とも、出席、意欲の順で平均値が高くなっている。これは、先述したように高く評価されたいという間接的な影響が考えられる。

相違点としては、興味がある内容であったかの順位について、人間心理学科は3位であるのに対し、企業マネジメント学科では6位、介護福祉学科では10位であった。前述のとおり、企業マネジメント学科と、介護福祉学科は、種目内容について飽きやすい様子が見受けられたので、新しい種目を始める1回目の授業の際に、どれだけ種目の楽しさに触れ、興味を持続できる授業が行えるかが重要な要素であるといえる。

### 3. 性別による比較検討

図3は、性別による平均値を表したものである。また、表4は、性別による平均値と標準偏差を表している。

図3より、全体的には、出席を除いて、すべての得点で女性より男性が高かった。

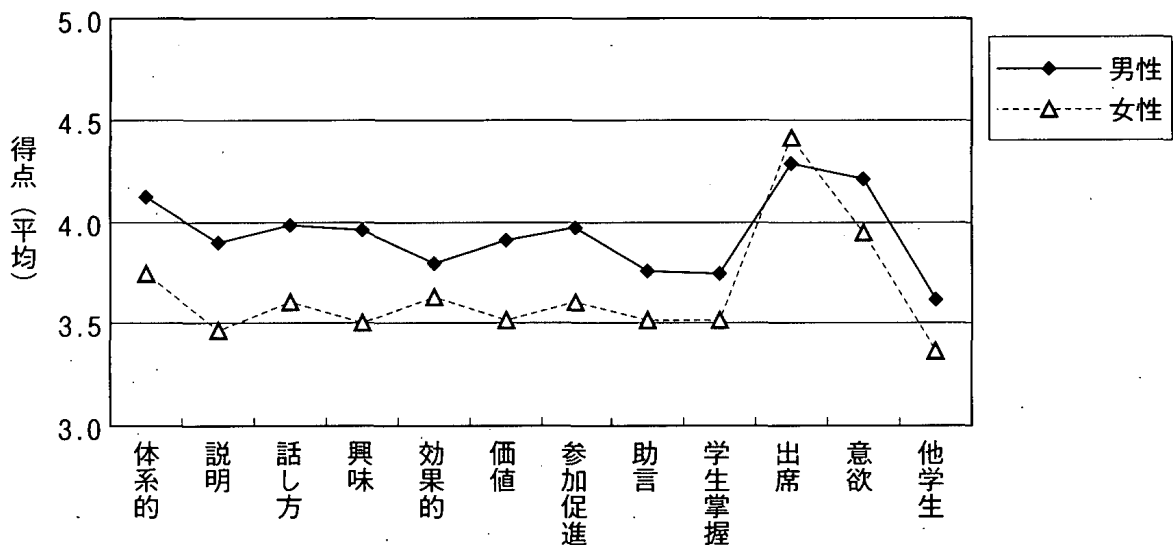


図3 男女別 得点グラフ

さらに表4より、体系的であったか、説明の仕方は良かったか、話は聞き取りやすかったか、興味のあるものであったか、価値があったか、参加を促したかで、女性より男性の方が有意に値が高かった。

表4 性別の平均値と標準偏差

	男 性		女 性	
	平均 (順位)	標準偏差	平均 (順位)	標準偏差
体 系 的	4.1 (3)	0.95	3.7* (3)	0.88
説 明	3.9 (7)	0.90	3.5* (7)	0.88
話 し 方	4.0 (4)	0.97	3.6* (4)	0.97
興 味	4.0 (4)	1.09	3.5* (7)	1.17
効 果 的	3.8 (9)	1.06	3.6 (4)	0.97
価 値	3.9 (7)	1.12	3.5* (7)	0.94
参 加 促 進	4.0 (4)	0.92	3.6* (4)	0.93
助 言	3.8 (9)	0.98	3.5 (7)	0.98
学 生 掌 握	3.7 (11)	1.04	3.5 (7)	0.99
出 席	4.3 (1)	1.08	4.4 (1)	0.94
意 欲	4.2 (2)	1.00	3.9 (2)	1.09
他 学 生	3.6 (12)	1.18	3.4 (12)	1.28

\* P < 0.05

このことから、男性・女性ともに、聞き取りやすく、理解しやすい説明の仕方を工夫すべきであったと考えられる。その一つに、技術説明の際には、多くの説明を行うのではなく、一つの簡単な動作について集中して練習できるように説明し、練習させる必要があると考えられる。また、練習手順や意識して取り組むポイント等を教師が十分に説明したつもりであっても、学生がどのように行うか理解できていない状況が多々あったことから、事前の授業研究の際に、十分に具体的な必要事項を考えて、説明できるように準備しておく必要があったと考えられる。さらに、一方的に説明を行うのではなく、学生に積極的に考えられる授業にできるよう、質問を絶えず投げかけることが極めて重要だと思われる。

男女による興味内容についても差があったため、授業内容については、女性にも技術的に簡易であり、親しみやすい内容を考える必要があると考えられる。しかしながら、授業で行った3種類のニュースポーツは、技術的にも簡易であるスポーツだと思われるので、種目自体の楽しさを十分に理解させる必要があったと考えられる。

参加を促したかの項目については、留学生及び女性は友達同士の会話が多くの授業準備などが遅い傾向であったので、厳しく指導する必要があったと思われる。

また、表4より平均値の順位をみると、男性・女性共通して出席、意欲、体系的の順で平均値が高くなっている。これは、先述したように高く評価されたいという間接的な影響だと考えられる。

#### 4. スポーツ種目による比較検討

図4は、スポーツ種目ごとの平均値を表したものである。また、表5は、スポーツ種目ごとによる平均値と標準偏差を表している。さらに、表6は、スポーツ種目ごとの検定結果を表している。

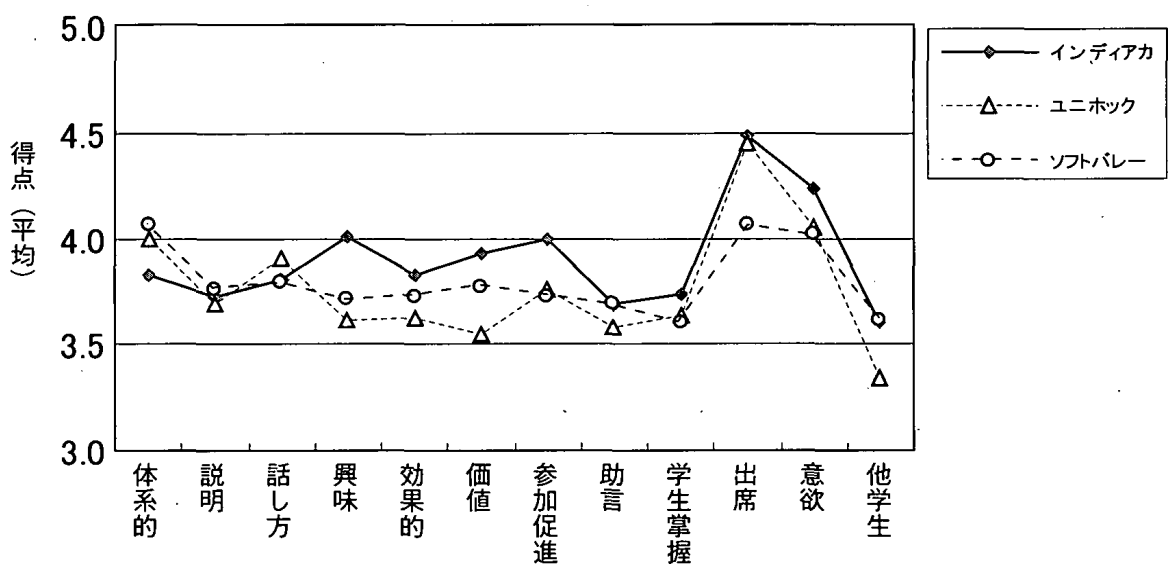


図4 種目別 得点グラフ

表5 スポーツ種目別の平均値と標準偏差

	インディアカ		ユニホック		ソフトバレーボール	
	平均(順位)	標準偏差	平均(順位)	標準偏差	平均(順位)	標準偏差
体系的	3.8 (6)	0.99	4.0 (3)	0.86	4.1 (1)	0.97
説明	3.7 (9)	0.97	3.7 (6)	0.78	3.8 (4)	0.98
話し方	3.8 (6)	1.05	3.9 (4)	0.78	3.8 (4)	1.11
興味	4.0 (3)	1.04	3.6 (7)	1.13	3.7 (7)	1.23
効果的	3.8 (6)	1.00	3.6 (7)	0.96	3.7 (7)	1.11
価値	3.9 (5)	1.02	3.5 (11)	1.06	3.8 (4)	1.09
参加促進	4.0 (3)	0.91	3.8 (5)	0.90	3.7 (7)	0.98
助言	3.7 (9)	0.91	3.6 (7)	0.91	3.7 (7)	1.12
学生掌握	3.7 (9)	1.01	3.6 (7)	1.02	3.6 (12)	1.04
出席	4.5 (1)	0.97	4.5 (1)	0.87	4.1 (1)	1.16
意欲	4.2 (2)	0.99	4.1 (2)	0.96	4.0 (3)	1.17
他学生	3.6 (12)	1.23	3.3 (12)	1.26	3.6 (12)	1.17

表6 種目別の検定結果(数字は危険率を示す)

	インディアカ : ユニホック	ユニホック : ソフトバレーボール	インディアカ : ソフトバレーボール
興味	0.02*		
価値	0.02*		
出席		0.02*	0.02*

\* P &lt; 0.05

表5から、インディアカとユニホックとの比較では、興味のある内容であったか、価値があったかについて、インディアカの方が有意に値が高かった。

このことから、ユニホックよりインディアカの方が、学生が興味を持ち、実際に授業を受けて価値あるものであったと満足していることがわかる。その要因としては、ユニホックは体の接触があり、ニュースポーツの中でも運動量が多く、激しいスポーツに分類される。それに対して、インディアカはバドミントンコートを用いて行うネットゲームであり、適度な運動量で、誰にでも親しみやすく、ゲーム展開も緩やかであることから、女性にもスポー

ツが苦手な学生にも楽しみやすいスポーツ種目だと考えられる。

また、ユニホックとソフトバレーボール、または、インディアカとソフトバレーボールとの間に、十分に出席したかでソフトバレーボールの方が有意に値が低かった。さらに、順位をみると、参加を促進させたかについて、ソフトバレーボールは他種目に比べて低かった。

このことから、ソフトバレーボールの授業では、十分に出席参加を促す必要があったと考えられる。

共通点としては、適切な助言を行ったか、学生を掌握できていたかが各種目とも、比較的低い得点であった。

このことから、種目に関わらず、各学生を深く観察し、的確なアドバイスで指導できるように努める必要があると考えられる。

相違点としては、表5から得点の順位を見ると、体系的であったかについて、ソフトバレーボールは1位であるのに対し、ユニホックは3位、インディアカは6位であった。このことから、学生は、第1 Semesterの後半の授業になるにしたがい、体系的に授業内容をとらえられるようになったと考えられる。

## 5. 外国人留学生と日本人学生との比較検討

図5は、外国人留学生と日本人学生ごとの平均値を表したものである。また、表7は、外国人留学生と日本人学生との平均値と標準偏差を表している。

図5より、全体的には、日本人学生より留学生の方が得点が高かった。

さらに、表7より、体系的であったか、説明の仕方は良かったか、興味のあるものであったか、効果的であったか、価値があったか、参加を促したか、助言をしたか、学生を掌握できていたか、他学生に勧めたいかについては、留学生の方が有意に値が高かった。

留学生については、日本語が十分に理解できる学生と、日本語が十分に理解できない学生とに差があるため、アンケート項目に回答する際にも項目の説明を十分に理解していないまま回答している学生がいる可能性はあるとい

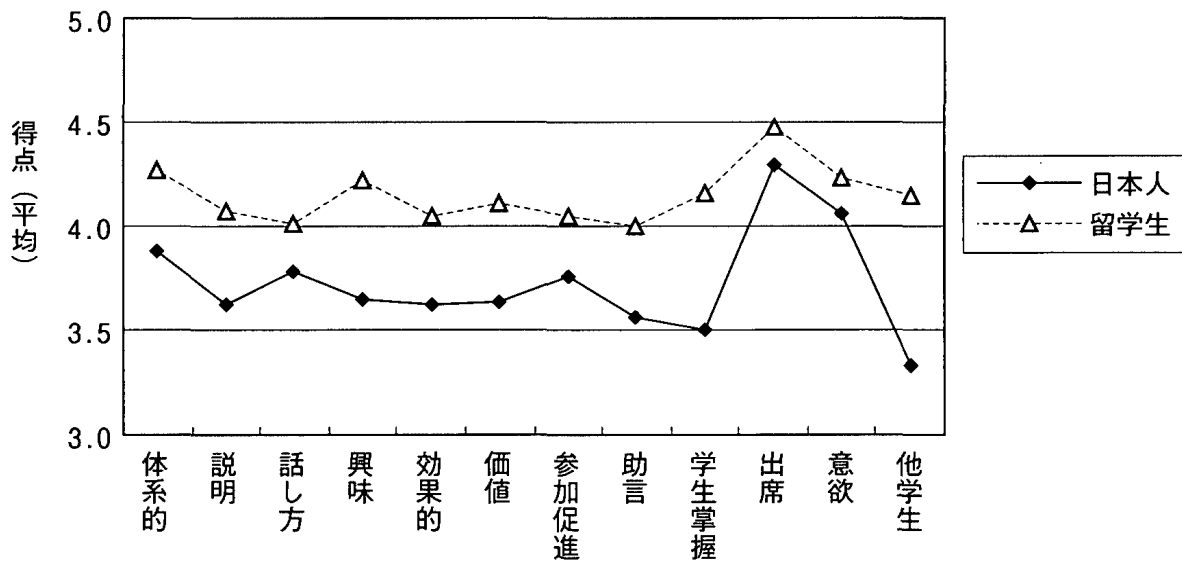


図5 日本人学生と留学生別 得点グラフ

表7 日本人学生と留学生の平均値と標準偏差説明

	日本人		留学生	
	平均 (順位)	標準偏差	平均 (順位)	標準偏差
体系的	3.9 (3)	0.94	4.3* (2)	0.89
説明	3.6 (6)	0.88	4.1* (6)	0.94
話し方	3.8 (4)	1.00	4.0 (11)	0.93
興味	3.6 (6)	1.18	4.2* (3)	0.92
効果的	3.6 (6)	1.01	4.1* (6)	1.03
価値	3.6 (6)	1.08	4.1* (6)	0.96
参加促進	3.8 (4)	0.95	4.1* (6)	0.87
助言	3.6 (6)	0.96	4.0* (11)	1.00
学生掌握	3.5 (11)	1.01	4.2* (3)	0.92
出席	4.3 (1)	1.08	4.5 (1)	0.84
意欲	4.1 (2)	1.06	4.2 (3)	0.98
他学生	3.3 (12)	1.23	4.1* (6)	0.99

\* P < 0.05



える。しかし、留学生は、ゲームになると常に真剣に取り組む学生が多く見られたことから、各項目の得点が高くなっているとも考えられる。

共通点としては、説明の仕方、効果的であったか、価値があったか、出席したか、意欲的に取り組んだかは、同程度の順位であった。

相違点として最も特徴的なのは、話し方・助言などの会話の問題であった。話は聞き取りやすかったかでは、日本人学生が4位であるのに対し、留学生では11位であった。また、助言を十分に行ったかについては、日本人学生が6位であるのに対し、留学生では11位であった。このことから、留学生にはできるだけ簡単でわかりやすい説明で十分に説明・指導を行う必要があると考えられる。

反対に、学生を掌握できていたかについては、日本人学生は11位であり、留学生は3位であった。このことから、日本人学生は、もっと教員に、一人一人の学生について深く指導してもらうことを望んでいると考えられる。

#### IV. 研究の要約と総括

##### 1. 研究の要約

##### 1) 4年制学部と短期大学部の比較検討

##### (1) 全体的傾向

全項目において、4年制学部と短期大学部には有意な差がある。このことから、短期大学部では、全体的な授業の改善が必要である。

##### (2) 共通点

出席したか、意欲があるかの順で平均値が高いことが共通している。

##### (3) 相違点

興味があったかの項目の順位は、4年制学部では3位であることにに対し、短期大学部では9位である。このことから短期大学部では、授業内容に興味を持つよう工夫・改善する必要がある。

##### 2) 各学科の比較検討

##### (1) 全体的傾向

- ①人間心理学科・企業マネジメント学科・介護福祉学科の順で平均値が低い。このことから、学科の特性も考慮して授業を行う必要がある。
- ②人間心理学科と企業マネジメント学科の比較では、興味のある内容であったか、よく出席したかで人間心理学部が有意に値が高い。
- ③人間心理学科と介護福祉学科比較では、全てにおいて人間心理学科の方が有意に値が高い。

## (2) 共通点

出席したか、意欲があるかの順位で平均値が高いことが共通している。

## (3) 相違点

興味がある内容であったかの順位について、人間心理学科は3位であるのに対し、企業マネジメント学科では6位、介護福祉学科では10位である。

## 3) 性別による比較検討

### (1) 全体的傾向

- ①全体的に男性の方が女性より平均値が高い。
- ②体系的であったか、説明の仕方は良かったか、話は聞き取りやすかったか、興味のあるものであったか、価値があったか、参加を促したかについて、女性より男性の方が有意に値が高い。このことから、女性においては、説明や指導方法を男性より丁寧に行う必要がある。

### (2) 共通点

男性も女性も共通して、出席、意欲、体系的の順で平均値が高い。

### (3) 相違点

出席したかの得点については、女性の方が高い。

## 4) スポーツ種目による比較検討

### (1) 全体的傾向

- ①インディアカとユニホックとの比較では、興味のあるものであったか、価値があったかについて、インディアカの方が有意に値が高い。このことから、インディアカは学生に親しみやすいスポーツ種目であるとい

える。

(2) 共通点

各種目共通して、助言を十分に行ったか、学生を掌握できていたかが比較的低い得点である。このことから、種目に関わらず、各学生を深く観察し、的確なアドバイスで指導できるように努める必要がある。

(3) 相違点

得点の順位を見ると、体系的であったかについて、ソフトバレーボールは1位であるのに対し、ユニホックは3位、インディアカは6位である。

5) 日本人学生と留学生による比較検討

(1) 全体的傾向

①全体的に日本人学生より留学生の方の得点が高い。

②体系的であったか、説明の仕方は良かったか、興味のあるものであったか、効果的であったか、価値があったか、参加を促したか、助言をしたか、学生を掌握できていたか、他学生に勧めたいかについて、日本人学生より留学生の方が有意に値が高い。

(2) 共通点

各項目において、説明の仕方は良かったか、効果的であったか、価値があったか、出席したか、意欲的に取り組んだかは、同程度の順位である。

(3) 相違点

相違点としては、話は聞き取りやすかったかでは、日本人学生が4位であるのに対し、留学生では11位である。また、助言を十分に行ったかの項目については、日本人学生が6位であるのに対し、留学生は11位である。このことから、留学生にはできるだけ簡単でわかりやすい説明で、十分に説明や指導を行う必要がある。

## 2. 研究の総括

本研究は、大学における体育実技の授業に対する学生による主観的評価に基づいて、分析・検討を試みたものである。その結果は、要約したとおりで

あるが、これらのことから、次のように総括することができる。

すなわち、大学教育であっても専門教育は勿論のこと、その基礎教育である教養教育においても、究極的に目指すことは、人間教育と社会生活における自立教育<sup>9)10)</sup>に繋がるものでなければならないことはいうまでもないことである。

本研究を行った授業の目的は、「学生各個人の今持っている能力を基礎に、積極的な関心・意欲・態度で取り組み、試行錯誤と相互交流の中で思考力・判断力・応用力を養い、技能や知識・理解力を習得し、生活スポーツ化できるようにすること」とした。その結果は、十分に満足できるものではないが、一応の成果を上げることができたといえる。しかし、この結果を参考に、今後の授業を改善していくことが重要であるといえる。

そのためには、授業の中で、状況に応じて指導行動を使い分けることが重要であるといえる。すなわち、授業における教員の果たす役割として、どのような時にプランナー・オーガナイザー・インストラクター・トレーナー・コーチ・アドバイザー・カウンセラーなどの指導行動を使い分けられたらよいかという、複雑職務の同時遂行能力を習得することが必要である<sup>11)</sup>。

今後も、自分の授業をよりよくするための研究を継続することの重要性を、改めて再認識した。

なお、この研究は、結果と考察及び要約は多胡が担当し、その他の部分は全て永田が担当した。

#### 【引用・参考文献】

- 1) 太田和良幸 大学マネジメントの理論と実際 競争的環境の中で個性輝く大学を創るために pp117-141 黎明書房 2003
- 2) 文部省 平成11年度 我が国の文教施策 進む「教育改革」 pp10-11 1999
- 3) 高等教育研究会 大学の多様な発展を目指して I pp1-9 ぎょうせい

1991

- 4) 愛知教育大学 自己点検・評価報告書(2000年度) pp34-35 愛知教育大学 2001
- 5) 愛知教育大学 年次報告書(2000) pp30-34 愛知教育大学 2001
- 6) 愛知教育大学 2000年度学生による授業評価調査 pp23-31 愛知教育大学 2000
- 7) 市川須美子他 平成15年版 教育小六法 pp233-239 学陽書房 2003
- 8) 高等教育研究会 大学の多様な発展を目指してⅦ pp44-60 ぎょうせい 1999
- 9) 宇土正彦他 体育科教育法入門 pp88-108 大修館書店 1990
- 10) 宇土正彦他 新訂 体育科教育法講義 pp66-68 大修館書店 2000
- 11) 永田靖章 スポーツ集団のマネジメント pp162-166 ぎょうせい 1998